

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)は、河川再生に関わる事例・経験・活動・人材等を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に2006年11月に設立されました。また、日中韓を中心に活動する「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時に海外の素晴らしい取組みを日本国内に還元する役割を担います。

目次	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ	1
➤ 会員寄稿記事	2
➤ 研究・事例紹介	14
➤ JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ	15
➤ 会議・イベント案内	16
➤ 書籍等の紹介	16
➤ 会員募集中	17

## 巻頭書記

一年で最も暑い季節を迎えました。涼を求めて水辺に集う子ども達や家族連れを多く見かけ、また川での様々な行事が催されるなど、この時期は川の賑わいを体感する絶好の機会と言えます。その一方で、海や川での悲しい事故も多数発生しており、水の怖さを忘れることなく、川と触れ合う素敵な夏をお過ごし下さい。本号では、PRAGMO 翻訳ボランティアの公募結果、

また JRRN 会員寄稿記事として「スイスの川と氷河を訪ねて」「川系男子の『川と人』めぐり No.4」「水辺からのメッセージ No.39」の三つを紹介しています。更に、研究・事例紹介としてマレーシアにおける「住民参加型河川管理ハンドブック」を取り上げました。

引き続き、全国の川に関わる様々なニュースを、会員皆様よりお待ちしております。

## JRRN 事務局からのお知らせ

### 英国河川再生モニタリング手引き PRAGMO(日本語版)の翻訳ボランティア公募結果

7月10日(火)まで実施させて頂きました PRAGMO 翻訳ボランティア公募の結果、JRRN 個人会員より 10名(内訳:3名の技術者及び研究者、7名の学生会員)の方々の協力を得て翻訳活動に取組めることとなりました。



河川再生モニタリング手引き「PRAGMO」  
[http://www.therrc.co.uk/rrc\\_pragmo.php](http://www.therrc.co.uk/rrc_pragmo.php)

予算等の制約から、今回は英語原本の全 320 ページ(本篇 120 ページ及び付録資料篇 200 ページ)の翻訳はできませんが、河川再生モニタリング活動の基本的

な考え方を普及することを目的に、本篇と一部付録資料を合わせ、約 135 ページを翻訳する予定です。

また、本年 12 月 1 日(土)には、PRAGMO 日本語版の完成を記念し、原本出版元である英国河川再生センター(RRC)幹部を招聘した講演会も開催の予定ですので、本翻訳活動の進捗は後日改めてご紹介させていただきます。

なお、PRAGMO 日本語版作成及び講演行事は、(財)河川環境管理財団の河川整備基金の助成を受けて実施致します。

#### <翻訳対象箇所及び実施分担>

章	分担	章	分担
本篇 1 章	JRRN 会員	本篇 10 章	JRRN 会員
本篇 2 章	JRRN 会員	本篇 11 章	JRRN 会員
本篇 3 章	JRRN 会員	本篇 12 章	原文掲載
本篇 4 章	JRRN 会員	App 1 章	JRRN 会員
本篇 5 章	JRRN 会員	App 2 章	JRRN 会員
本篇 6 章	JRRN 会員	App 3 章	JRRN 会員
本篇 7 章	JRRN 事務局	App 4 章	JRRN 会員
本篇 8 章	JRRN 事務局	App 6 章	JRRN 会員
本篇 9 章	JRRN 会員	App 7 章	JRRN 事務局

(JRRN 事務局・和田彰)

## 会員寄稿記事(1)

### スイスの川と氷河を訪ねて(2012年7月)

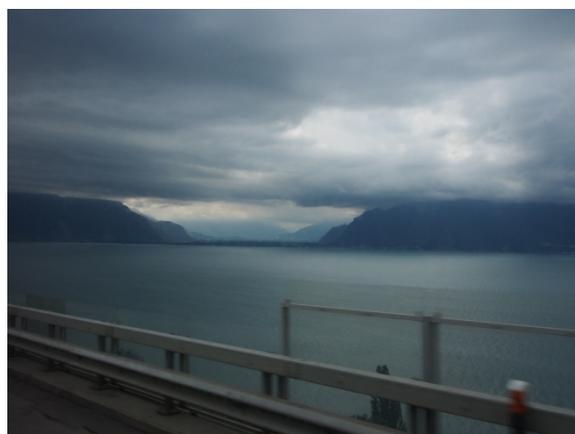
寄稿者：横田潤一郎（公益財団法人リバーフロント研究所・JRRN 会員）

国際都市、ジュネーブはレマン湖の出口に位置します。レマン湖は中央ヨーロッパ第2の湖。面積は582平方キロメートル、琵琶湖より少し小さい三日月形の湖です。ジュネーブからバスでレマン湖岸北側の日当たりのよい丘陵地帯、世界遺産にもなっているブドウ畑を眺めながら、高速道路をはしりました。対岸に見える街はフランス、というのは海に囲まれた日本にはあまり馴染みのない光景です。

走ること約一時間、遠くに見えてきた深いU字形の谷はローヌの谷。氷河時代に深く深く削られた名残でしょうか、すいこまれるようにバスは入ってゆきます。このレマン湖や、ドイツ、スイス、オーストリア国境に位置するボーデン湖を始め、この地方に沢山ある三日月形の湖は、まだ寒い時代、氷河に削られて出来た氷河湖なのです。

ローヌ谷は深い谷ですが、まだこのあたりは谷底も広く明るい斜面が広がっています。そのため、レマン湖沿岸やローヌ谷の出口に近いこのあたりは、日本ではあまり知られていない、ワインの名産地だそうです。スイスのワインは生産量がそれほど多くなく、自国で消費されてしまうため国外にはあまり出ていきません。この地方には、ローザンヌやシオンといった産地があり、スーパーでは安く美味しいワインを沢山買うことができます。濃厚なチーズにあう辛口の白ワインが沢山あります。

余談ではありますが、ローヌ谷をどんどん上がっていった先、フィスパーテルミネンにも世界で最も高地のワイン葡萄畑と醸造所があり、紀元前から作られているという葡萄・ハイダから作られるワインは、アルコール度数が高く、微発泡性のある白ワインです。基



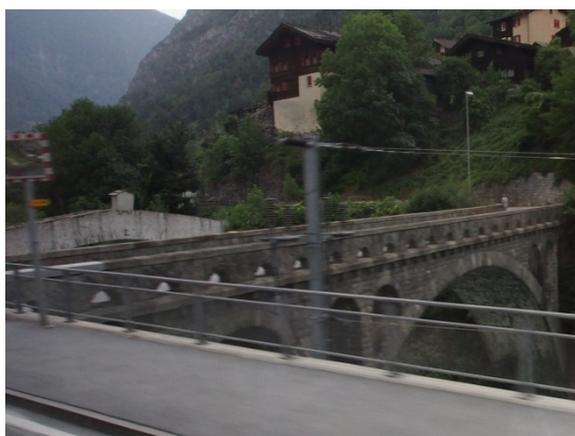
本的にヨーロッパの水は硬水ですが、この地域でも石灰が多く溶け出した硬水で、川や湖の水の色を見れば、青白い色をしています。硬水は非常に飲みづらく、水を飲みやすくするためにワインは必須でした。

さて、ローヌの谷はマッターホルンへ向かう観光道路でもあり、バカンスを避暑地で過ごす旅行者でいっぱいです。我々同様、日本人のツアー客もたくさん。スイスのチョコレート、トブラローネを買ったら、ローヌ谷の谷底から支流へ入り、山の草原、アルプを目指します。私達が入ってきた谷は、有名なマッターホルンを望むツェルマット、ではなく、おとなりのサース渓谷最上流の村、サースフェーです。2010年のサッカーワールドカップでは、この村で日本代表が直前合宿を行いました。

ヨーロッパ全般に言えることですが、彼らは古い町並みや古い家具など、古いものをとても大切にします。それは川の中でも同様。古い橋が各地に残っていますが、ここサース谷にも、400年以上前につくられた橋があります（写真で左側の橋）。

サースフェーはアルプスの真珠といわれる美しい村で、その村のすぐ上には氷河が迫ってきています。夏でも山には雪がありますから、ヨーロッパではアルペンリゾート、特にスノーボードのメッカとして有名だそうです。

この氷河は、かつてはもっと大きく、村のすぐ上まで覆いかぶさるように流れ込んでいる古い写真がホテルの壁にかかっていた。氷河の末端では、つい最近まで氷が削っていたらう岩が、生々しくむき出しになっています。氷から融けだした水は、その岩の隙間を縫うように流れだし、やがて小川となって、アルプ（高山の放牧地）や村々を駆け抜けて渓谷へと落ちていきます。





サース谷からローヌの谷底を挟んで反対側、アレッチ地方へやってきました。ここには、アルプス最大のアレッチ氷河があります。延長 24km、面積 120k m<sup>2</sup>、重さは 270 億トンにもなるというこの氷河は世界遺産に指定されています。

アレッチ氷河の特徴は、その真ん中あたりに走る 2本の黒い線です。これは、モレーンといい、氷河がその重みで削った岩石が堆積したものです。氷河の側面部、いわば氷河の岸にできるのがサイドモレーンで、この氷河の真ん中に走るモレーンは、氷河と氷河がぶつかったときに 2つのサイドモレーンが合流してできた中央モレーンというものです。アレッチ氷河にははっきりとした中央モレーンが 2つありますが、これはすなわち 3本の氷河が合流してできたことを意味します。今回は訪れていませんが、ヨーロッパの鉄道駅として最標高地点にあるユングフラウヨッホへ行けば、アレッチ氷河を作り出す万年雪を間近に見ることができます。



サース溪谷の氷河と同様、このアレッチ氷河も近年は温暖化の影響で、かなり小さくなってしまったようです。かつて探検家が撮影した写真をみて、改めて温暖化の急激な進行を目の当たりにしました。日本でも近年、立山の雪渓が氷河であると発表され話題になりましたが、スイスの魅力は、数多くの氷河、そして氷河が創り出した様々な地形やそこに流れる川を比較的簡単に見られるところにあります。

川系男子の『川と人』めぐり No. 4 ～木曾三川, 花月川・山国川～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 生命環境科学研究科 博士前期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』  
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

1. 水色のシーズンがやってきた！

7月に入り、大学は夏休みに突入。私の大学は三学期制のため、7月から8月が夏季休暇になっている。なので、最も川が輝く時期を楽しむことができる。今月は河川愛護月間であるということもあり、たくさん川へ出かけた(表1)。また、JRRNでインターシップも行っており、河川関係者の方のお話を聞く機会も多い。今回は特に印象に残っている2河川(木曾川, 山国川)について紹介する。

表1 筆者の7月の川めぐり一覧

訪問日	河川名	所在地	内容
7月6日	落合川	東京都東久留米市	湧水由来の水質良好な都市河川を見学
7月11日	隅田川	東京都中央区	隅田川のリバーフロントを散策
7月13日	隅田川	東京都中央区	日の出棧橋～浅草まで遊覧船で見学
7月14日 ～16日	木曾三川	岐阜県, 愛知県	木曾川水系(特に飛騨川, 木曾川, 長良川)を巡る。
7月18日 ～24日	遠賀川	福岡県	実家に帰省
7月19日	花月川 山国川	大分県	今月の二度に渡る北部九州豪雨の現場視察
7月20日	大分川 大野川 番匠川	大分県	大分の一級河川を部分的に見学
7月23日	那珂川	福岡県福岡市	水上バスで都市空間の中の河川景観を見学
7月27日 ～29日	諏訪湖	長野県	諏訪湖16kmを歩いて一周

木曾三川

2. 1 約束の木曾三川へ

友人Kの実家がある岐阜県下呂市に遊びに行くことになった。というのも、4年近く前に友人が福岡の私の実家に遊びに来た時に「今度は岐阜へ」と言われていた約束を果たすためだ。約束こそ忘れてなかったが、ずっとのびのびになっていた。木曾三川を2泊3日で時間の限り、周ろうという計画だ。

中津川ICを降りた頃にはもう夕方、天気曇りということもあり、辺りはうっすら暗くなり始めていた。城山大橋を渡ると、茶色く濁った木曾川が一瞬みえた。どうも先日から大雨で川の水位は平水位ではないらしい。明日以降少しでも川遊びができることを願いつつ、下呂へ向かった。山間の飛騨川沿いを走っていると、遠くにぼんやりと明かりが見えてきた。「ようこそ下呂温泉へ」の看板を抜けると温泉街が広がっていた。ここ下呂温泉は日本三名泉と言われる温泉街だ。飛騨川沿いに温泉街が並び、風情ある景観を形成している。飛騨川を遡り、実家へ向かった。

友人実家に到着した頃にはもう19時を回っていた。友人のご両親に迎えられ、今日から2泊3日私ともう一人の友人Sと2人でお世話になる。夕食で飛騨牛や飛騨川のアユなどを地域の特産品をご馳走になる。

ご両親の話では、この辺りは飛騨川のことを益田

川とも呼ぶそうだ。昔からアユ漁なども盛んだっただけで、昨年何人かで漁をした時には1回で500匹近く採れたとか。風呂上りに明日のコースを確認しあった予定では、大ヶ洞ダム(飛騨川水系)→岩屋ダム(飛騨川水系)→郡上八幡(長良川水系)→徳山ダム(揖斐川水系)→横山ダム(揖斐川水系)→下呂市の予定だ。木曾三川を横断していく明日のコースを楽しみにしながら床についた。

2. 2 大雨の飛騨川

早朝、すさまじい雨音が外から聞こえる。外は大雨のようだ。この地域は家の中に防災無線が設置されているようで、放送が入ってきた。「ただ今、下呂市〇〇地区一帯で停電が発生しています。また、古関～後津の区間で通行止めも発生しています。下呂市防災からのお知らせでした。」このシステムは非常に優れたシステムだと思った。非常時にこうして、各家々に確実に情報が伝えられるという防災面で抜群の効果を発揮している。

停電は早朝数時間で収まったが、停電などは過去に例がなく、激しい雨だったらしい。異例の事態ということもあり、コース変更。徳山ダム方面までは距離があり、各道に規制がかかっていることが予想されるため、コースからはずし、飛騨川周辺を中心に周ることにした。出発し、朝霧橋からみる飛騨川は茶色の水がなみなみに恐ろしく流れていた(写真1)。橋を渡っている時、K曰く、小学校の低学年の頃は橋の下流で川遊びし、高学年になると、橋の上流で川遊びをしていたらしい。普段はどんなに水がきれい、美しい河原か力説してくれた。普段の飛騨川の姿が見られなくて残念だったが、Kの温厚で誠実な性格をみていると、なんとなく、どんな川か想像できた。



写真1 朝霧橋からの増水した飛騨川

## 2. 3 飛驒川の支流めぐり

飛驒川沿いを遡り、支川の大ヶ洞川<sup>おおがほら</sup>へ。大ヶ洞川は飛驒川上流域の支川の小さな川だが、この日はすさまじい勢いの水が全てを飲み込もうとするくらいに轟々と流れ下っていた。大ヶ洞ダムへ右側からのアクセス道は24時間累積降水量が80mmを越えたため、通行規制がかかっていた。もう一本の迂回路の方は通れたので、そちらから行くことに。

大ヶ洞ダムへ到着。見学して驚いたのが、ダム湖の大きさ。今までみたダムの中で一番小さい。湛水面積4ha、総貯水量45万m<sup>3</sup>と小さく、2本の小さな沢から水が集水されていた(写真2)。



写真2 大ヶ洞ダム ダム湖

ダムを訪れた記念に管理者の方にダムカードをいただくと、「こんな雨の日によく来たねえ。」と感心されてしまった。自然調節方式(ゲートレス)の放流口からは一定水位になった水が流れ落ちていた。雨の日ならではの光景もみることができ、満足したところで、大ヶ洞ダムを後にした。

大ヶ洞川を下り、飛驒川に戻り、次の行き先をどこにするか決めないまま川沿いを走っていたら山乃口川と飛驒川の合流点に差し掛かった。合流点を見て驚いたのが川の色である(写真3)。

飛驒川は茶色く濁っているのに対し、山之口川からの水は濁りのない深緑色である。これから推察するに、この川の流域にはあまり雨が降っていないのではないかと河原へアクセスできることを祈り、山之口川の上流を目指した。予想通り山之口川の上流はあまり雨が降っていないようで、濁度もなければ水位の上昇後もほとんど見られない。ちょうどよい広場になった河原があったので、降りてみた。

川の流れは清く、上流に立ち込める川霧が雨の日ならではの美しさを演出していた(写真4)。透き通った川の水は川遊びには十分魅力的だったが、水が冷たく、とても入って遊ぶことはできそうになかった。持ってきたスローロープを使って河原でレスキュー訓練。スローロープとは川での救助の際に使用するロープだが、救助用の投げ方、救助される側のロープの受け取り方など、普段からの練習が必要である。私は以前、川に学ぶ体験活動協議会(RAC)で川の指導者資格の講習を受けていたので二人にロ

ープの投げ方と救助のされ方をレクチャーした。近年、水難事故の件数をみると非常に多くなっている。

(子どもの水辺サポートセンター水難事故マップ：<http://www.mizube-support-center.org/map/suinan/index.html>)川で遊ぶ時には危険を認識し、正しく遊びましょう。



写真3 山之口川(左)と飛驒川の合流点



写真4 山之口川の河原

## 2. 4 閉ざされた岩屋ダム

山之口川で川遊びをした後、一山越えたところにある岩屋ダムへ。岩屋ダムは飛驒川の支流の馬瀬川に位置し、県内でも屈指の大きさを誇るダムだ。一目みたいと上流側の道からアクセスを試みる。山越えをするために、高台の道へ上ると、飛驒川がよくみえる。飛驒川を中心にして両岸に河岸段丘が形成されているのがよくわかる(写真5)。Kに聞くと、このあたりのバスは古関(上段経由)と古関(下段経由)があるらしい。



写真5 飛騨川周辺の河岸段丘と2段に渡る集落

山越えをし、岩屋ダムへ向かって馬瀬川沿いの道を下る。途中、通行止めにもぶち当たっては対岸の道に迂回しながらなんとかダムへ近づいていく。あと少しのところまで両岸とも通行止めの扉に重く閉ざされてしまった(写真6)。諦めて元来た道を引き返すことに。引き返している最中の林道で、どこかのアニメでみたことあるような風景を見つけたので写真一枚(写真7)。「神社前」と書かれたのかなこのバス停。観光地でもなんでもないとこだが、心に安らぎをくれる。日常の風景が素晴らしい流域だ。



写真6 大雨のため通行止めの岩屋ダム上流の道



写真7 林道のバス停にて

一度は諦めかけた岩屋ダムへのアクセスだったが、下流からアクセスできる道があることが分かり、いったん飛騨川を下り、馬瀬川下流から上流へ遡る道へ。下流からダム方面へ行くと、関西方面からの車が多数ダム方面へ。ダム以外は特に公共施設はない

場所なので、おそらくこの人達も岩屋ダム見たさに集まってきているダムマニアの方達だろう。(案の定、車の中に「ダム」の本が見えた。)ダムマニアさんが大勢ダムに向かっているなら大丈夫だろうと上っていったが、また重い鉄格子の扉が行く手をはばんでいた。諦めきれず、対岸の道を進んだ。いくらなんでも全ての道が閉ざされているはずはない。どこかにアクセスできる道が残されていると思いながら。対岸の道につくと、鉄格子の扉はなく、進んでいけそう。しかし、道の真ん中に一台の車が我々の行く手を阻むかのように止まっていた。運転席のおじさんがこちらに睨みをきかせている。車から降りて事情をきくと、ダム関係者の方で、対岸や上流端からのアクセスする道の交通規制が解除されない限り、特別車以外通してはいけないことになっているという。順調にいけば今日中には道路管理者から解除の連絡が入るそう。事情を理解し、岩屋ダムへ行くのは諦めた。そんな事情も知らず、申し訳なかった。

## 2. 5 豊富な水の街 郡上八幡

午前中あらゆる道から岩屋ダムへ行こうとしたが、行くことを諦め、長良川方面へ行くことに。馬瀬川から西に山を越えると、郡上八幡へ行ける。何回もヘアピンカーブの続く峠道を抜け、郡上八幡へ。郡上八幡は、水の街で、湧水が街の至る所で湧き出ている、古くから水と関わりの深い街だ。街の中心には長良川の支流の吉田川が流れており、街は至るところ水道で張り巡らされている。店先でキュウリやトマトを冷やしているのも郡上八幡ならではの光景かもしれない(写真8)。昨日から郡上おどり(国指定重要無形民俗文化財)が始まったようで、郡上の街は賑わっていた。

郡上八幡で特に見たかったのが「宗祇水」(写真9)。吉田川のさらに支流の小駄良川の窪みに水の湧く祠がある。祠に近い最も上流端が水源、次の段が飲料水、次が米洗い・スイカ冷やし場、次が野菜洗い、最も下段がさらし場となっている。これは古くからこの場所の水利用の人々が、上の水、下の水と利用のルールを決め、利用してきた水文化そのものだ。

街を出て、付近の長良川へ。付近の勝更大橋から眺める長良川は飛騨川の激流のようにこそなっていないが、豊富な水量は十分迫力がある。郡上八幡ではないが、私は以前、長良川へカヌーで来た時、ライフジャケットを付けていたにも関わらず水中に2mくらい引きずりこまれたことがあるのを思い出し、余りの迫力に思わず息を飲んだ。自然の驚異を身をもって知ったからこそ、分かるこの迫力。橋から流れを一時眺め、長良川を後にした。



写真8 店先の冷やし野菜



写真9 岩屋ダムダム湖とダムカード



写真9 宗祇水の水洗い場

## 2. 6 執念の岩屋ダム

長良川を後にし、吉田川を遡り、再び飛騨川流域へ。朝の岩屋ダムの上流からアクセスの道へ戻ってきた。三度目の正直ということで、もう一度だけ、岩屋ダムに続く道を下って行く。時刻は夕方 17 時を回った。ちょうど閉鎖されていた門のところへ辿り着くと、重く閉ざされていたダムへの扉が開門した。思わず、すれ違いさまに道路管理者の方の車にお辞儀をして、岩屋ダムへ向かった。こんなに執念深くダムへ行ったことはないためか、ダムが近づくとともにどんどん高揚した。

ダム湖が見えてきた。愛知県の重要な水瓶であり、白いロックフィルの堤体こそ、今日見たくてしょうがなかった岩屋ダムだ。岩屋ダムは巨大なロックフィルダムで、堤高 128m、堤頂長 366m、総貯水量 1 億 7350 万 m<sup>3</sup> である。堤体からはダム湖の端が見えない(写真 10)のダムは傾斜コア型ロックフィルダムと言われており、通常では、水の遮蔽部であるコアの部分が垂直に立っているが、このダムは傾斜している構造で大変めずらしい。建設費も高いことから国内最後の傾斜コア型ロックフィルダムであろうといわれている。ダム管理者の方にダムカードいただき、本日一番の達成感を味わいダムを後にした。岩屋ダムを見たいという執念がダムへ導いてくれた。

## 2. 7 阿木川の大小ダム

最終日、Kの実家を後にする。ご両親は「木曾三川は広過ぎて、まわりきれなかったでしょう。またおいで。」と送り出して下さった。この場を借りて御礼申し上げる。

最終日の今日は木曾川を下りつつ、支流の阿木川をみて、その後一気に木曾三川の河口まで下り、長良川河口堰を見る予定。時間も限られているので、どんどん下り、木曾川の支流の阿木川へ。阿木川では二つのダムをみることができる。一つは阿木川ダム。堤高 102m、堤頂長 362m、総貯水量 4,800 万 m<sup>3</sup> とわりと大きいダムだ(写真 10)。岩屋ダムと比べて、堤体の大きさはそう変わらないものの、集水域が小さいためか総貯水量は約 4 分の 1 だ。ここでもダムカードをゲット！阿木川には最上流端にもう一つダムがある。岩村ダムと呼ばれるダムで、主に水道用として用いられており、総貯水量はわずか 18 万 m<sup>3</sup> しかない。大ヶ洞ダムでも小さいと思ったがそれよりはるかに小さい。ダム湖の湛水面積は 2ha しかなく、ため池と言ってもいいような可愛らしいダムだ(写真 11) どうしてこんな小さなダムが必要だったのか考えてみたが、おそらく岩村への給水のためと考えられる。岩村一帯は傾斜面に位置しているため、付近の河川から安定した水の取水は難しく、最上流端にダムをつくることで給水するのが最上の方策だったのであろう。普段ダムといえば大きなものを思い浮かべるが、小さなダムがなぜそこに必要だったかを考えるのは非常に興味深い。



写真10 阿木川ダム



写真 11 湛水面積の小さな岩村ダム

## 2. 8 木曾三川のフィナーレ長良川河口堰

本当だと、途中木曾三川公園からの眺めやデ・レーケによる三川分離事業の跡など巡りたかったが、時間もないので一気に河口まで下った。(長良川河口堰の賛否を巡る問題は多岐に及ぶため、今回は割愛。)川巡りの最終地点を河口にすることが多いが、いつも大迫力に圧倒してしまう。揖斐川方面を周れなかった分、飛騨川を丁寧に周ることができたが、3日間では木曾三川は広すぎた。未訪問地は次回の課題として、木曾三川めぐりに幕を閉じたい。

最後に、30日に木曾川(一宮市)において発生した水難事故で中学生3名の尊い命が失われたことに哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りする。

## 花月川・山国川

### 3. 1 北部九州豪雨の爪痕

先日、福岡に帰省した際、少し時間があつたので、先日の筑後川流域と山国川流域の被災状況が気になったので、自身で状況を確認めにいったことを後々の記録のために記述する(7月19日調査による)。

北部九州では、7月3日と7月14日に梅雨前線の停滞に伴い、各地で大雨が多発し、土砂災害や河川の氾濫など大きな被害をもたらした。その中でも特に被害が顕著だったのが、筑後川水系花月川(大分県日田市)と山国川(大分県中津市)である。

花月川は筑後川の支流であるが、7月3日の早朝より、雨が降り始め、9時までの3時間に172mmを記録し、観測史上第1位を記録した。また、山国川ぼ耶馬溪観測所においても1時間に約110mmと観測史上第1位を記録した。これにより、

さらに、7月11日にも同規模以上の大雨が発生し、観測記録を更新した。この2回の出水により、矢部川(福岡県)、花月川(大分県)、山国川(大分県)、白川(熊本県)などにおいて大規模な水害が発生した。

### 3. 2 花月川の被害

花月川は筑後川の支流で、日田市を流れる河川で

あり、情緒漂う水郷都市を流れる川である。しかし、今回の水害では一気に水位が上がり、計画高水位を越え、堤内に大きな被害をもたらした(写真13)。

花月川付近の日田市豆田地区は4月に筑後川めぐりで訪れたばかりであった(JRRN5月号)。川沿いを歩くと各所に水害の跡がみられた。各所で関係者などに話を聞いた(表2)。特に印象深かったのが花月川上流にお住まいの88歳のおばあさんに聞いた話。3日早朝に雨が降り出し、山間のため、土砂災害が心配になってきた頃、隣の家の方が車で避難をさせてくれたという。92歳のご主人は体が不自由なため、車で避難でき、大変助かったと話していた。また、災害復旧工事個所の様子も記述をした(表3)。花月川で特にひどかったのが地蔵元橋付近である(写真14)。この橋下流の右岸側には集落が密集していたが、左岸側が切れたことにより、被害は最小限におさまっているが、民家1軒と周辺水田、飲料メーカー工場などに被害が出ている。橋下流左岸側は一部堤防が破堤したため、一度堤防を人為的に壊し、応急的な堤防を築堤している。



写真 13 7月3日午前10時の花月川(国土交通省筑後川河川事務所ライブカメラより)



写真 14 破堤し、新たに仮築堤した左岸堤防

### 3. 3 山国川の被害

山国川は中津市を流れる河川で、花月川と背反して流れる河川である。

山国川一帯にも被害が発生し、各所で大きな被害が見られる(表2,表3)。神社の鳥居が土砂崩れで埋まってしまっている箇所をみると、災害のなまなましさがよく残っている。

表2 被災箇所でのヒアリング内容

河川	ヒアリング対象者	内容	場所
花月川(筑後川)	側溝整備の工事関係者	水が床上まできた。側溝に土砂がたまりはけなくなった。	高速下流側
花月川(筑後川)	日田市役所職員	堤防から水があふれ、中学校も水が流れ込む。堤防の緊急補強工事中。	中学校前
花月川(筑後川)	工事関係者	堤防の左岸側が切れ、水田や民家に流れ込む。右岸側に人家が多かったが、左岸が決壊したため被害はほとんどなし。堤防は緊急的に岩を積んでいる。	地藏元橋
花月川(筑後川)	88歳女性	裏の山の山崩れが心配で夜9時頃避難。92歳の主人が体が不自由なため、隣の人の車に乗せてもらい小学校へ。避難中は隣の部落の人がおにぎりをつくってきてくれた。夕方避難勧告解除され、家に戻る。毎年大雨で避難することはあるものの、昭和28年水害もひどかったが、今回も同じくらいひどかった。年をとって体が思うように動かないので、川などは見に行かず避難までは家でじっと過ごしていた。	上一ノ瀬
山国川	酒屋主人	2回目がひどかった。1回目に川底に土砂が堆積していたため、水位があがるのが早く、浸水被害も大きかった。7時から8時の間にあっという間に水位が上がリ、逃げる暇なし。(避難場所は近くのお寺)酒屋の2階で過ごす。1階は浸水し、酒瓶は4本しか割れなかったものの、水につかったため商品としては全滅。酒蔵によっては30~40%の還付をしてくれるところもあってありがたい。	大勢橋付近酒屋
山国川	道の駅店員(女性)	6:30にいつも通り仕事に来る。7:00に開店するが、雨がどんどん強くなり、息子に迎えに来てもらい自宅へ帰る。道の駅自体は避難所となり、周辺集落の人や中津方面に抜ける途中のドライバーなどの避難所として開放。レストランの座敷などで横になれる。1回目の水害の時には14人。2回目は15人以上。夕方に解除(1回目)周囲の人は昭和28年水害なみの酷さといっている。	道の駅やまくに
山国川	80代女性	2回目の水害がひどかった。雨が強くなってきたので、早朝に10分かけて徒歩で公民館に避難。避難先の公民館から帰ると自宅は床上まで全て水に浸かり、家の中が泥だらけ。隣の家の田んぼ(家の上流側)の土手が壊れ、我が家に水や泥が流れ込み、蔵も穴があき、味噌や米も全てだめになった。干していた靴なども全て流された。昭和20年に下流の集落に嫁に来て、昭和34年にここに引っ越してきたが、こんなことは初めてだった。一人暮らしのため、ボランティアの人が来てくれてありがたい。1回目の水害後はダイハツの若い人が数名。2回目(今回)は近くの土木会社の人が出てくれた。この地区が被害がひどかったことは後ためにも伝えてほしい。	中津市宮園

表3 被災箇所の状況

河川	場所	内容	対応
花月川	城町橋下流右岸側	橋直下の右岸側の堤防が洗掘	テトラポット等を被災箇所に置き、緊急対応
花月川	城町橋上流	左岸側の河床が土砂で埋まる	ショベルカーにて埋没箇所を河床掘削。
花月川	住宅地	水が床上浸水	国土交通省ポンプ車が堤内地から水を吐き出す。
花月川	住宅地	川からの土砂で側溝1m近くが埋まる	ショベルカーで土砂を除去
花月川	中学校付近	堤防から堤内へ越流。	堤防(掘り込み式河道)が弱くなっている可能性が高いため、堤内側に巨大土嚢を置き、補強中。
花月川	財津橋上流左岸側	石組みの固定堰に土砂がたまり、水位上昇し、左岸側の水田へ越流。稲は7割近く倒れている。	現在のところ特になし
花月川	地藏元橋下流	左岸側堤防破堤。水が水田や付近の民家、飲料メーカーに流れ込む。	水田の土砂を撤去。破堤堤防の残骸をいったん取り除き、岩組みの応急堤防を築堤。右岸側の巨石除去。
花月川	猿王橋下流右岸側	右岸側堤防破堤。水田と堤防の境界が巨石が堆積し不明。電信柱3分の1が巨石で埋まる。	現在のところ特になし
上志川(山国川)	三所権現鳥居	鳥居先の神社への道が山側の沢からの水で崩落。	現在のところ特になし
山国川	朝陽吊橋	流木がたまり崩落寸前。利用不可。	現在のところ特になし
山国川	朝陽吊橋下流左岸側	道路が一部洗掘	片側通行規制、工事は未着工。
山国川	大勢橋付近酒屋	右岸側が越流し、酒屋が浸水。最高浸水150cm程度。商品は全滅	個人で店の中の片づけ
山国川	宮園地区集落	人家が床上浸水。泥が流れ込み、家財道具や蔵の置物が使用不可。	近くの企業の災害復旧ボランティアにより、畳上げ、床下の土砂撤去中。
山移川(山国川)	耶馬溪ダム右岸側道路	山側が土砂災害により片側通行不可	片側通行規制しながら、復旧作業中
山国川	??橋	中央部から左岸側にかけてが崩落	立ち入り禁止、工事は未着工
山国川	やばの駅(山国川右岸側)	右岸付近の道路両岸の物産店が床上浸水	災害復旧ボランティアによる土砂撤去
山国川	青の洞門(山国川左岸側)	洞門(トンネル)の9割程度浸水	土砂撤去中
山国川	耶馬溪橋(オランダ橋)	石積みの手すり等一部欠落	車道通行規制。工事は未着工
山国川	河口(左岸側)	左岸側堤防一部洗掘	規制線にて立ち入り禁止。工事は未着工

大勢橋付近の酒屋の方に聞いた話では、朝方に川の水が上がってきたかと思うとみるみる越流し、一階が水に浸かり逃げる暇もなかったという。特に下流に行くほど、越流箇所の被害が顕著になってくる。

橋が壊れかけている箇所（写真15）や、道路を洗掘した痕跡（写真16）などが各所にみられる。特に宮園地区はひどい被害であり、被災された80代の一人暮らしのおばあさんに特別に許可をいただき、被害状況をみさせていただいた。



写真15 橋に木材が乗り上げた痕跡



写真16 川沿いの道路の被害

おばあさんの家は、床上浸水し、全ての床を剥がし、復旧ボランティアの方によって作業中であった（写真17）。



写真17 床上浸水した家屋（許可により掲載）

私を家の縁側まで連れてくると、腰を下ろして当時の状況を語り始めた。「水がどんどん、あがってきましたけん、これはあぶなかと思ひ、公民館へ逃げたとですよ。」逃げる時は既にひざ下まで水があったという。

夕方家に戻ってくると、家中水浸しで、愕然としたという。「私は昭和20年に下流の集落に嫁に来て、昭和34年にここに引っ越してきましたけど、こんなことは初めてでした。」最もひどい水害と言われた昭和28年水害を経験された方がそれ以上だったと語るのを聞くと今回の水害がいかに大きいものだったかということがうかがえる。「1回目の3日より、2回目の13日のほうが水がよく上がってきました。ここまできました。」と1回目の1mよりも20cm程度上を指差した。

「一人暮らしやけん、ボランティアの人が来てくれるのがありがたいです。」地元の土木会社の方が復旧ボランティアにいられていた。私も以前2006年の鹿児島県川内川水害で復旧ボランティアに参加したことがあるので、泥の運び出しの大変さがよくわかる。本当なら、ここで私も一緒に加勢をしたかったが、今回の目的は別にあつたので、ボランティアの方に事情を説明し、申し訳ない気持ちを伝えた。「おばあちゃんの話し相手になってやって下さい。まとめるのも大事なことですよ。」と言って下さったのがありがたかった。おばあさんに再度、自身の大学院生の身分と、外部向けの川記事でこのことを個人が特定できない範囲でお伝えしていか尋ねたところ、「こんな水害は初めてでした。もうこんなことが起こらんように皆さんにどうぞ伝えて下さい。」とご快諾いただいた。

おばあさんの家を後にし、さらに下流へ下る。物産店街も水に二度水に浸かり、壊滅状態だった（写真18）。さらに小説「恩讐の彼方に（菊池寛）」で有名な青の洞門は9割以上が水に浸かり、泥のかき出し作業に追われていた（写真19）。その他、人道橋も越水により橋げたごとなくなっていた（写真20）。



写真18 被災した物産店街（店の裏側は川）



写真 19 対岸からみた青の洞門（ほぼ復旧）



写真 20 橋げたが流された人道橋

今回の洪水に関して、道の駅「やまくに」の方に話を聴くと、1 回目より 2 回目の洪水がひどかったと言われる。1 回目の洪水により、河床に土砂が堆積し、その 10 日後に同規模以上の出水が発生したため、より早く水位が上昇したようだ。道の駅は急遽周辺集落の人や中津に抜ける途中のドライバーのための避難所として開放し、1 回目（3 日）には 14 名、2 回目（14 日）には 20 名以上が利用したという。

山国川には耶馬溪ダム（写真 21）という国管理のダムがあるが、水害発生時の洪水調整効果として、下流 11 km 区間に渡って水位を 45cm 低下させたと発表している（山国川河川事務所調べ）。洪水調整効果のあった区間においても被害がでていたことからいかに今回の水害が大きなものだったか実感できた。



写真 21 洪水調整効果を発揮した耶馬溪ダム

### 3. 4 天災は忘れた頃にやって来る

寺田寅彦の有名な言葉であるが、まさにその通りで、年々によって被害の場所に差がある。今回の北部九州での豪雨で本流域では死者は 1 名の方がお亡くなりになった。ご冥福を申し上げる。地震と違い、水害の場合は雨の降り始めからのリードタイムが長い。適切に避難をすることで死亡を限りなく 0 に近づけることができると思う。今回の水害を我々は記憶し、今後の防災に役立てていきたい。最後に今回の水害で早くヒアリングに応じて下さった関係各位に感謝申し上げるとともに、復旧支援に当たられた水害ボランティアの方、寝ずに防災対策にあたった行政の方々に敬意を表したい。

### 4. 川が好き 川にうつった 空も好き

この標語は平成 16 年度に河川愛護推進標語の最優秀賞に選ばれた小児がんで他界した山口県周南市の有国遊雲君の作品で、現在も国土交通省の河川愛護推進標語として河川愛護月間を中心に活用されている。先日諏訪湖流域を訪れた時にぴったりな 1 枚を撮影したので掲載して 7 月の川巡りに幕を閉じたい（写真 22）。なつやすみの川と人めぐり、8 月も続く。



写真 22 蓼科ダム計画中止点（現在は小規模ため池）

#### 参考資料

山国川河川事務所記者発表資料：  
[http://www.qsr.mlit.go.jp/yamakuni/pdf/news\\_201207\\_488.pdf](http://www.qsr.mlit.go.jp/yamakuni/pdf/news_201207_488.pdf)  
（最終閲覧日：7 月 31 日）

#### 【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987 年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代には YNHC（青少年博物学会）、大学時代では JOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。

筑波大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『郊外の湖沼・河川流域における社会変化に伴う流域管理のあり方に関して』と題し、流域の水質・水量の将来予測や河川市民団体の特性について研究中。最近のお気に入りには川の中に入って川遊びをすること。

## 水辺からのメッセージ No.39

国土文化研究所 特任研究員 岡村幸二 (JRRN 会員)

北国街道の宿継として：  
街道宿場の役割を終えた後も養蚕業で栄え現在まで歴史街道の風情を保つ



撮影：2012年6月（長野県・東御市海野宿）

### ◆歴史の荒波を越えて

江戸時代には北国街道の宿駅として栄えました。明治20年に信越本線が開通すると宿場は衰退し、旅籠当時の二階の大部屋を養蚕業に活かして再び繁栄を築いています。昭和62年に重要伝統的建造物群保存地区に指定されて以後、道の中央を流れる水路を境に散策路と車道に区分されています。水路の石垣や縁石などディテールデザインに配慮が行き届いています。

※国土文化研究所は、株式会社建設技術研究所のシンクタンク組織です。

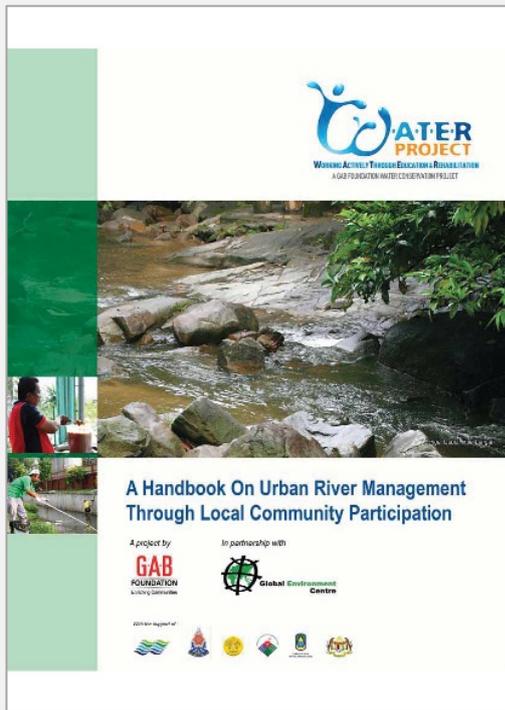
### ■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。(JRRN 事務局)

## 研究・事例紹介

### マレーシアに学ぶ河川再生 ～「住民参加型河川管理ハンドブック」のご紹介

河川再生に関わる諸外国の取組みとして、マレーシアに拠点を置く GAB Foundation 及び Global environment Centre より 2011 年に発行されました住民参加型河川管理ハンドブック「Handbook On Urban River Management Through Local Community Participation」をご紹介させていただきます。



※以下よりダウンロード可能

<http://jp.a-rr.net/jp/resources/guideline/135.html>

#### <主な目次>

1. 環境とは何か？
2. 川と水～生命の源
  - 川とは何か？
  - 川と人々の関わり
  - 水問題
3. Way 川再生事業における住民参加の事例
4. 河川の管理とは～私たちの責任として
  - 政府機関と民間の果たす役割
  - コミュニティの果たす役割
5. 河川管理ガイド
  - コミュニティ強化の政府機関向けガイド
  - 地域主導に向けた地域団体向けガイド

付録 1. 河川図の作成

付録 2. 支援者獲得や提案書作成のヒント

付録 3. 水質モニタリングについて

付録 4. 生物調査について

付録 5. 用語集

本ハンドブックは、マレーシアの首都・クアラルンプールを流れる Sungai Way (クラン川の支川・Way 川) における 3 年間の住民参加型河川再生プロジェクトにおける取組みや教訓を取りまとめたもので、以下の三つを目的に作成されたものです。

- マレーシアにおける地域住民参加を通じた都市河川再生の段階的な手順を提供する。
- 住民主体の河川再生を更に推進する。
- 都市河川の再生における、政府機関・企業・NGO・地域住民の協働の作法を示す。

また、本ハンドブックでは、住民参加型の河川管理を担う行政機関職員、地域主導の河川再生を目指す地域団体や NGO、更に河川再生の推進に貢献する民間セクターを対象に執筆され、それぞれの立場で留意すべき事項が丁寧に解説されています。

既に途上国を脱し、東南アジア経済の牽引役として発展を続けているマレーシアですが、この国の河川管理は、JICA 等を通じた長年の日本の技術協力の影響を強く受けております。中でも、本ハンドブックが対象とする河川環境改善に向けた住民参加の歴史は、1990 年代前半に日本より紹介されたラブリバーキャンペーン(日本で 1970 年代より導入された「河川愛護月間」)に始まり、これがマレーシア国民の河川に対する意識を一気に高めるきっかけとなり、現在も“Love Our Rivers Campaign”として川への住民参加の象徴的な行事として受け継がれています。(詳細は月刊河川「RIVER COMES AGAIN～マレーシア河川、復権の熱い息吹、1995 年 6 月・7 月」をご参照ください)

日本の技術援助をきっかけとして、住民参加型の河川管理がマレーシアに導入されてから約 20 年。こうした歴史背景も踏まえつつ、現在のマレーシアにおける行政と市民が連携した都市河川再生の取組みを理解する上で貴重な資料です。

なお、本年 9 月に「マレーシア河川フォーラム」が都市河川再生をテーマにマレーシアにて開催されます。JRRN では、「日本におけるパートナーシップによる川づくり」と題した講演を予定しておりますので、マレーシアの最新河川再生事情について、後日改めてご紹介させていただきます。(JRRN 事務局・和田彰)

# JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ(2012年7月末までの提供分)

## 【JRRN 会員からの提供情報】

### ■「第5回 いい川・いい川づくりワークショップ(9月22-23日開催)」募集開始

2012年9月22日～23日に東京にて開催される「第5回 いい川・いい川づくりワークショップ」への参加団体募集開始のご案内を頂きました。

(応募締切: 8月27日(月)迄)

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/720.html>



## 【JRRN 会員からの提供情報】

### ■「河川文化を語る会」

JRRN 団体会員である公益社団法人日本河川協会から河川文化を語る会のご案内です。

#### 【第170回】

◆テーマ:「日本の“いい川”づくりとNPO」  
◆講師: 山道省三氏(特定非営利活動法人 全国水環境交流会 代表理事)

◆日時: 2012年8月21日(火) 18:00~20:00

◆場所: シェーンバッハ・サボア(砂防会館)(東京都千代田区)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/689.html>

#### 【第171回】

◆テーマ:「防災社会の再構築に向けて～東日本大震災の教訓と今後の地震防災対策」

◆講師: 濱田政則(はまだ まさのり)氏(早稲田大学理工学術院 社会環境工学科 教授)

◆日時: 2012年9月10日(月) 18:00~20:00

◆場所: 厚生会館(全国土木建築健保)(東京都千代田区)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/700.html>

## 【JRRN 会員からの提供情報】

### ■『神田川サミット2012 on ship』(9/29開催)

JRRN 団体会員である「神田川ネットワーク」様より、東京の水辺の新しい楽しみ方を探るイベント「神田川サミット2012」のご案内を頂きました。

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/731.html>



## 【JRRN 会員からの提供情報】

### ■「カリフォルニア州サンウォーキン川のサケ遡上のための河川復元計画見直し」に関する報道記事紹介

(株)日建技術コンサルタント・益倉克成様より、米国における河川再生の話題をご提供頂きました。

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/709.html>

#### San Joaquin River restoration will cost \$900m

Timeline is being pushed back three years.

By Mark Green - The Fresno Bee

Published: July 30, 2012 11:58 AM

0 Comments

On the fast-track valley prairie, the San Joaquin River looks like any other irrigation ditch area

somewhat gray and brown when it recedes that this ditch has a \$900-million future.

The federal government has finally attached that price tag to the historic, remote area of this wet

area of reconnecting it to the Pacific Ocean and restoring long-dead salmon runs.

And the schedule for fully restoring those salmon runs has been pushed back about three years

from the Oct. 31 deadline this year.

The U.S. Bureau of Reclamation last week released the estimate and the schedule as part of a

draft project plan that is already getting heat from farmers and environmentalists. The plan will

remain in draft form the rest of the year while the federal agency connects and makes revisions.

The draft answers and questions about the price range of the 155-mile restoration in 2006 when

the restoration agreement was signed among farmers, environmentalists and the federal

government, the price was estimated between \$200,000 and \$1 billion.

## 【JRRN 会員からの提供情報】

### ■『生物多様性サマースクール「なごや生きものいきいきウィーク」(8/20-26開催)

愛魚家・宇地原様より御提供頂いたイベント情報です。

・会場: なごや生物多様性センター  
・主催: なごや生物多様性保全活動協議会

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/737.html>



## 【海外からの提供情報】

### ■「欧州 RESTORE プロジェクトの最新ニュースレター(2012年6月号)」ご紹介



欧州 RESTORE プロジェクトの最新ニュースレターを RESTORE 事務局より送付頂きました。本号では、国際河川賞の地域版として「欧州河川賞」設立案内や、東欧における河川再生に関わる知見共有の取組み、またロンドン南西部の Wandle 川再生事業の話題などが紹介されています。

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/697.html>

## 【海外からの提供情報】

### ■「RRC (英国河川再生センター) の最新会報(Bulletin)」ご紹介

RRC の最新会報(2012年7月号)を RRC 事務局より送付頂きました。

本号では、ロンドンオリンピック開催を記念しての英国河川再生の種目別優秀河川募集、第13回英国河川再生センター年次講演会の講演資料等一式公開報告、都市河川調査マニュアルの紹介、また河川再生に関わる書籍出版情報や行事案内等が紹介されています。

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/727.html>



## 会議・イベント案内（2012年8月以降）

### （JRRN/ARRN 主催・共催の会議・イベント）

#### ■JRRN ワークショップ「英国に学ぶ河川再生～PRAGMO を活用した河川モニタリング」（仮題）開催！

PRAGMO 日本語翻訳版の発刊を記念し、英国河川再生センター(RRC)幹部を講師に招き、PRAGMO を活用した河川モニタリングに関わるワークショップを開催致します。（平成24年度河川整備基金助成事業）

○開催日（予定）： 2012年12月1日（土）午後 ○開催場所： 東京都内

※本行事の詳細が決まり次第、JRRN ウェブサイト及びニュースレター等を通じてご案内いたします。

### （河川再生に関する主なイベント）

#### ■第5回雨水ネットワーク会議 全国大会2012 in 東京

○日時：2012年8月4日（土）～5日（日）

○主催：雨水ネットワーク会議全国大会 in 東京  
実行委員会

○場所： 東京大学生産技術研究所

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1506.html>

#### ■氾濫原研究会 2012 in 豊岡

○日時：2012年8月11日（土）～12日（日）

○場所： 兵庫県立コウノトリの郷公園 他

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1494.html>

#### ■生物多様性サマースクール「なごや生きものいきいきウィーク」（P15 参照）

○日時：2012年8月20日（月）～26日（日）

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1514.html>

#### ■第170回 河川文化を語る会『日本の“いい川”づくりとNPO』（P15 参照）

○日時：2012年8月21日（火） 18:00～20:00

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1497.html>

#### ■第171回 河川文化を語る会『防災社会の再構築に向けて～東日本大震災の教訓と今後の地震防災対策』（P15 参照）

○日時：2012年9月10日（月） 18:00～20:00

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1501.html>

#### ■第5回 いい川・いい川づくりワークショップ

○日時：2012年9月22日（土）～9月23日（日）

○主催：いい川・いい川づくり実行委員会

○場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1446.html>

#### ■神田川サミット 2012 on ship (P15 参照)

○日時：2012年9月29日（土）

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1512.html>

#### ■皆様からのイベント情報提供をお待ちしています！

全国で河川再生に向けた様々な行事が開催されています。ローカル情報のPRや共有を目的に、皆様からの情報提供をお待ちしております。（JRRN 事務局）

## 書籍等の紹介

#### ■ アジアに適応した河川環境再生の手引き ver.2 (2012.2 発刊)

- ・発行：アジア河川・流域再生ネットワーク (ARRN)
- ・監修：ARRN 技術委員会
- ・編集：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)
- ・価格：無料



※本冊子の入手方法  
本手引きをご希望の方は、JRRN 事務局までご連絡ください。なお、JRRN 会員限定サービスとさせていただきます。送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。非会員の方は、JRRN 会員登録後にお申込下さい。

[info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net) / 電話：03-6228-3862

#### ■ 川ガキ(2012.7 発刊)

- ・著者：村山嘉昭
- ・出版社：飛鳥新社
- ・価格：¥1,575 (税込)
- ・ISBN-13: 978-4864101813



本書は、日本の原風景とも言える日本各地の川に棲息する“川ガキ”たちを追ったフォトエッセイ集です。

なお、JRRN ニュースレター2011年2月号内で、著者の村山様より頂戴したメッセージを紹介しています。

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/newsletter/90>

# 会員募集中

## ■ JRRN の登録資格（団体・個人）

JRRN への登録は、団体・個人を問わず**無料**です。  
 市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、  
 所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご  
 参加を歓迎いたします。

## ■ 会員の特典

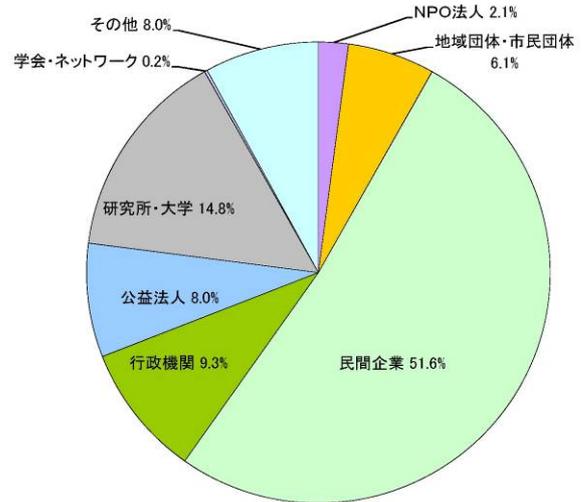
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」を  
 ご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

## ■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2012年7月31日時点の個人会員構成  
 (個人会員数：565名、団体会員数：46団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

## 【発行・問合せ先】



日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局  
 公益財団法人リバーフロント研究所 内  
 〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階  
 Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: [info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net) URL: <http://www.a-rr.net/jp/>

JRRN は、「アジア河川・流域再生ネットワーク構築と活用に関する共同研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

